【シンポジウム記録】

（2004年度 スポーツ政策シンポジウム　2004年10月16日（土）開催）

「地域貢献とスポーツ文化」

真山　達志・横山　勝彦

【司会】 ただいまよりスポーツ政策シンポジウムを始めさせていただきます。コーディネーターをご紹介いたします。同志社大学法学部横山勝彦先生です。

【横山】 本日のコーディネーターを務めます横山です。よろしくお願い申し上げます。開会に先立ちまして総合政策科学研究科長の新川先生よりご挨拶をいただきます。

【新川】 本日はスポーツ政策シンポジウムにたくさんお集まりいただきましてありがとうございます。これから始まる「地域貢献とスポーツ文化」と題しましたキーノートレクチャー、そしてその後の活発なご議論に期待しております。本日は、ラグビー日本代表監督の萩本さん、日本ラグビーフットボール協会普及育成員の大八木さんにおいでいただき、本学のスタッフとともにご議論をいただくということで大変感謝をしているところでございます。本日の成果に大いに期待させていただきたいと思っております。本研究科では、昨年もスポーツ政策のシンポジウムを野球を中心にさせていただきました。今年はラグビーということで、たくさんの皆さん方にお集まりいただきました。

同志社大学総合政策研究科は来年で10年を迎えます。まだ若い研究科ですが、この10年間にさまざまな成果を出してきたつもりであります。その中で、来年度は本研究科に新たなヒューマン・セキュリティ研究コース、先端技術研究にかかわるTIMの研究コースを、従来の公共政策コース、企業政策コースに加えて設置することとなりました。スポーツ分野も私どもの研究科では従来から大きなウェイトを置いてきました。スポーツ政策、スポーツ行政、スポーツ経営の講座を設置し、スポーツ分野の指導的な人材を輩出することを、これまでめざしてやってきたわけであります。本研究科も10年の節目を迎え、スポーツ政策も含めて今後さらに次のステップ、つまりより地域に貢献し、日本全体、世界に向けての新たな役割を模索する段階にきていると考えております。

本日は、特に地域貢献という観点から、これからのスポーツのあり方、スポーツ指導のあり方等々もご議論になろうかと思います。日本社会での新たなスポーツ文化が定着し、さらに発展できるような議論に期待をしたいと思っております。コーディネートをお願いしました横山先生始め熱意あるキーノートレクチャーの皆様方、会場の皆様方の熱意で、このシンポジウムを成功に導いていただければと考えております。本日は本当にありがとうございました。挨拶に代えさせていただきます。

【横山】 どうもありがとうございました。それでは、私の方から本シンポジウムの主旨と先生方のご紹介、進め方についてお話しさせていただきます。テーマは「地域貢献とスポーツ文化」ということでありますが、スポーツで地域貢献をしようということが言われて久しいと思います。その火付け役は、Jリーグ、サッカーであろうかと思います。鹿島アントラーズの成功例がありまして、地域のスポーツ関係者だけではなく、各リーグのリーダーたちの熱意、施設の建設などの現実的なバックアップシステム、市民への参加の要請などがそのベースになったということでありますが、その効果としては、若い人たちの地元への定着が図られた、ボランティア精

神が根づいた、高校の部活動やサーカー以外の他の競技のレベルアップも図られた、有名選手の移籍希望が増えたと報告されております。

単に地域、エリアの充実だけでなく、サッカーの競技そのものが量的にも質的にも拡大したのではないか。そういうきっかけになったかと思います。地域貢献は地域振興ということでありまして、耳慣れた言葉では地域密着ということでありますが、それは経済の活性化を招きます。崩壊しつつあると言われるコミュニティが再生する。立場、分野、世代、年代を超えた共有物として認識され、結果、交流が可能になるといった効果が期待されるということであります。

本日は、こうしたことをサッカーと、もともとはフットボールということでルーツが同じラグビーというスポーツ文化を通して考えられないか、ということがねらいであります。普段我々はスポーツということになると勝ち負けが念頭にありまして、スポーツといえば競技力の強化となります。地域貢献となりますと、それには直接的には結びつかないのではないかというのが一般的な理解かと思います。そういうことではなく、地域貢献が立派に競技力向上にも結びつく可能性があるのではないかと、そういうことを考えてみたいというのが本シンポジウムの主旨でございます。お忙しい中、先生方に来ていただきました。ご講演いただく先生方をご紹介したいと思います。

まず同志社大学総合政策科学研究科教授で、本年開設されました政策学部長の任にも就かれておられます真山達志先生です。先生はラグビーはもとより、スポーツはなされていないということですが、同志社では硬式テニス部の部長をお務めで、大学におけるスポーツ振興に熱心に取り組まれている先生でございます。先生からはご専門の行政学、地方自治論の立場から「スポーツと地域」と題しまして、地域とスポーツの関係がどうあるべきか、現在どうなっているかを総論的にお話していただく予定です。

続きましてラグビー日本代表監督の萩本光威さんです。萩本さんは同志社大学４年生の時、全日本大学選手権制覇メンバーでありまして、その後、神戸製鋼所に進まれ、日本選手権７連覇という偉業をなし遂げられました。今、日本ラグビーのリーダーとしてその重責を担うお立場にあります。萩本さんからは「企業とオールジャパンの課題」と題して、ラグビートップリーグ、新しいファンの獲得、企業とオールジャパンとの結びつきはどうなっているのか、そのような点についてお話をしていただきます。

続きまして日本ラグビー協会普及育成委員の大八木淳史さんです。大八木さんはご紹介するまでもなく、マスコミ等に登場される有名なラガーマンですが、同志社大学時代は大学選手権３連覇、神戸製鋼の現役時代には日本選手権の７連覇、キャップ30という輝かしい実績を持っておられます。最近はラグビーだけではなく、同志社大学総合政策科学研究科へ合格され、新聞によりますと見事、一発合格ということでありますが、来年度から社会人大学院生として知的武装もしていくのだということでございます。大八木さんからは「普及活動と学校の取り組み」と題して、タグラグビーを普及して、ラグビーの競技人口を増やそうじゃないか、その中で地域の学校という教育現場とのコラボレーション、関係を結んでいったらどうかということのご提案があるかと思います。

最後になりましたが、同志社大学政策学部助教授の川井圭司先生です。先生は同志社大学ラグビー部のご出身です。学生時代から文武両道を実践されまして、法学部では労働法の立場で研究を続けられました。競技的にも高いレベルを維持されていたということを伺っています。スポーツ法学という新しい学問分野の第一人者として、同志社大学法学研究科からプロパーとして初めてだと思いますが、「プロスポーツ選手の法的地位」という論文で法学の博士号を取得されました。先生からは「スポーツと法整備」と題して、スポーツ選手の法的地位、社会保障制度について法的な保護がどのような形で進んでいるかという点についてお話していただきます。

先生方からのキーノートレクチャーの後、クロストーク、会場の皆様からご意見、ご質問をいただければと思います。その後、各先生方にとりまとめをしていただきます。最後まで実り多いシンポジウムになりますようご協力のほどお願いいたします。では、トップバッターの真山先生からお願いいたします。

【真山】　今、ご紹介にありましたように、今日の登壇者の中で唯一スポーツと無縁とも言っていいような超運動不足状態の人間です。ただ、手前

味噌的な言い方をしますと、普段、直接スポーツに関わることが少ないがゆえに、スポーツをやっていない人間の目から客観的に見たり、言ったりできるのではないかという立場で、今日は参加させていただいていると、自分なりに位置づけを勝手に決めております。

私に今日、与えられました役割は、スポーツと地域の関係、つまりスポーツの地域貢献についての総論的な話をすることだと考えております。特にスポーツ政策という言葉、概念がどういう意味を持っているのか、果たしてスポーツ政策が１つの領域とか分野として形成されつつあるのか、そしてスポーツ政策について検討したり考えたりすることに価値や意味があるのか、ということを考えるきっかけになればと思っております。今日は、スポーツ政策の中でも、オリンピックで勝利するとか金メダルをとるくらいのトップアスリートを養成するというような国家戦略に近いレベルでのスポーツ政策というよりは、地域との関わりということですので、地域レベルでのスポーツ政策に焦点を合わせたいと思います。

最近、地方レベル、地域レベルでは市町村合併ということで、新しい合併によって誕生した市の建設が話題になっているかと思います。こういう合併の論議には、いろんな側面があるのですが、突き詰めていきますと、今、地域の中にあるいろいろな問題を解決していこうという時に、今までの体制、枠組みではどうもうまくいかないという１つの限界が感じられていて、それが合併でうまくいくかどうかは一概には言えないのですが、１つの解決策として模索が行われているのかと思います。たとえば少子高齢化の問題とか地域経済が沈滞している、地方にいきますと商店街が活力をなくしてしまっていることもあります。こういう問題をどう解決するかということで、今、枠組み、手法が模索されています。その中の１つに、すべての地域ではないですが、スポーツに注目している例もあります。スポーツというのは以前からいろんな機能を持っている。多面的機能があると言われています。この多面的機能をうまく利用すれば地域の活性化ができるのではないかという期待があるわけです。高齢社会を迎えて抱えている問題を解決する１つの手段、手法になるのではないかという期待です。

では多面的機能にどんなものがあるかを確認してみたいと思います。伝統的に以前から言われている機能としては３つあると思います。１つが古い言い方かもしれませんが、心身の鍛練、スポーツをすることによって肉体と精神を鍛えるという機能がある。これはまさに日本の教育の中でも古くから位置づけられているスポーツ、運動、体育の機能の１つではないかと思います。これは別の言い方をすれば、教育的な機能と言うことができるかもしれません。学校で体育という形でスポーツを取り入れている根底にはこういう機能に対する期待があるかと思います。

そして比較的最近ですが、考えられているのは健康増進機能です。スポーツをすることによって基礎体力を高める、生活習慣病を予防することが考えられています。これは高齢化が進んでいく中で医療費がかさんでくる。介護のためのお金が膨大になり財政を圧迫するという中で、介護予防の観点からもそれぞれの年代、身体的状況に合わせたスポーツをうまく使うことによって健康を維持し、増進していく機能に注目しているということがあるかと思います。

３番目の機能として、以前から注目されているのは生涯学習機能です。それぞれの年代、体力に応じてスポーツを生涯ずっと継続して楽しむ。一種の生き甲斐とか楽しみを人生を通じて持っていく。その１つにスポーツを位置づけよう。これは生涯学習が注目されるようになって、とりわけクローズアップされてきている側面ではないかと思います。特に以前は、高齢者ですとゲートボールくらいしかなかったのですが、最近、さまざまなニュースポーツが開発されて、比較的軽く、楽しめるようになっているかと思います。こういう、従来からあるスポーツに対する期待、スポーツによって実現できる機能というものが、今後も追求されていくことは間違いないだろうと思いますし、スポーツの重要な側面ではないかと思います。

しかしながら、最近はスポーツに対する期待やスポーツによって解決しようとすることがさらにもっと広がってきているのではないかと思います。それはスポーツの持っている別の機能に対する注目です。その新しい別の機能を２つ挙げてみたいと思います。１つは地域経済を活性化する機能です。スポーツが最近、経済と結びついているということはオリンピックなどを見

ればわかることで、スポンサー、コマーシャルと一体化したスポーツがあります。オリンピックも企業のスポンサーがなければ成り立たないというくらい企業化、商業化が進んでいるという批判もありますが、現実の問題として経済とスポーツは強い結びつきを持ってきています。それが結果としてスポーツのさまざまな条件を整備し、向上していくことにもつがっているのも事実だと思います。そういう企業との関係だけではなく、地域経済という意味で経済とスポーツの関係も非常に重要ではないかと思います。

地域経済とスポーツの関係でわかりやすいのは、プロのスポーツチームを地元に誘致するということです。今、話題になっているのはプロ野球で、仙台にライブドアとか楽天という、今までですと無縁と思われていた企業が新たにチームをつくるということがあって、仙台、宮城県を中心に東北地方が、ある意味、盛り上がっている、元気が出ているわけです。積極的に誘致しよう、もし来てくれるならば協力を惜しまないという宮城県、仙台市などの地元自治体があるということは、裏を返せば、プロスポーツがフランチャイズの形で地域に来てくれることによってさまざまな効果があるというわけです。その効果の１つに、経済的効果があるのは否定できないと思います。直接的、間接的な意味での経済効果があるかと思います。プロスポーツが試合をすれば観客が大勢訪れるわけですから、物品の売り上げ、交通機関の料金、その他もろもろお金が落ちるという直接的なプラスもあります。それ以外にも、いろんな形でマスメディアに取り上げられて地域が注目されることによる間接的な経済効果もあるわけで、スポーツを利用して地域を活性化していくという視点には強いものがあります。

ただ、今のようなスポーツチームのフランチャイズは、すべての地域で皆が皆できるわけではありませんので、現実的にはいろいろな方法があります。フランチャイズまでは無理だという場合、プロ野球であれば、キャンプ地として利用してもらうだけでも地域経済にとってはかなり大きなプラス効果があります。さらには変わった形では、長野県真田町のようにスポーツの合宿地で売り出すところもあります。一時期、合宿のメッカというくらいラグビーのチームもよく利用していますが、スポーツが地域経済、地域活性化の１つの核、起爆剤になっているというケースがあります。

また、もう１つの側面、これは地域の活性化ということとも密接にかかわっていますが、スポーツを通じてコミュニティ、自治体全体を活性化するという側面でスポーツをとらえるということがあると思います。地域に総合型の地域スポーツクラブをつくろうという動きが、今、文部科学省を中心に推進されています。文部科学省としては2010年にすべての地域に最低１つは総合型地域スポーツクラブをつくっていこうということを考えています。あくまで文部科学省が考えている政策ですので、従来のスポーツというとらえ方もありますが、一方で総合型地域スポーツクラブを核にして、コミュニティにおける人の交流、コミュニティに対する一体感、アイデンティティを持ってもらうという効果も当然、狙っているわけです。スポーツによって地域の一体感をうみだしたり、スポーツクラブを運営していくころからボランティア活動を引き出していったりする。そして、それらをNPOを設立するための１つの誘因にする。インセンティブにしていく。このように、まちづくりを考える時の核にスポーツを据えるというのがあります。

まちづくりにスポーツを核に持ってきている代表的なところとしては、静岡県磐田市があるかと思います。ジュビロ磐田というサッカーチームが有名ですが、ラグビーもヤマハ発動機のチームがあって、ラグビーもジュビロという名前にして、サッカーとラグビーが磐田市ではジュビロと一体化していく。複数のスポーツが核になって、しかもかなりレベルの高いスポーツが核になってまちづくりを進めていこう。まちの特徴、売りものにしていく。まちの発展、活性化につなぎたいという動きだと思います。

磐田市にはスポーツのまちづくり推進課という組織もあります。スポーツ文化のまちづくり担当理事もおいています。かなり気合を入れてスポーツのまちづくりをやっているわけです。これは１つにはヤマハ発動機があって、サッカー、ラグビーに力を入れていて、強いチームを持っていた。それが今のジュビロにつながっているわけです。幸運、偶然もありますが、何らかの条件が揃った時、スポーツを核にしてまちづくりをしていくということも考えうる１つの例ではないかと思います。

このように地域経済を活性化していく、コミュニティや地域全体を活性化していくことにスポーツを活用していく視点が、最近、出てきております。日本の地方自治体の財政が厳しいと言われております。これらの動向は、ある意味、社会としてゆとりや余裕が出てきたことの現れかもしれません。食べることに汲々している時にはスポーツによるまちづくりという発想は出ないかもしれません。日本がそれだけ豊かになって、いろんな観点からまちづくりをとらえることができるようになった１つの現れかと思います。

スポーツによるまちづくり、スポーツによる地域の活性化が課題として取り上げられ、実践に移されつつあるということになりますと、冒頭に申し上げました従来からのスポーツの機能とは違ったスポーツの活用が行われるようになってきたということでありまして、従来の枠組み、考え方だけではうまくいかない、対応しきれない部分が出てくるかと思います。たとえば、心身の鍛練という教育的機能を中心に組み立てられてきたスポーツ政策、スポーツ行政は学校教育というところに力点があります。生涯学習の枠組みになったとはいっても、まだまだ日本では社会教育の伝統が残っている部分がありますので、従来の機能では教育委員会を中心とした教育というところがスポーツを扱う中心になっていたかと思います。今でも、スポーツ政策といっても実際に教育委員会が中心になって行っている地域は多数あります。ところが、経済の活性化、地域全体の活性化ということになると教育委員会だけの範囲の問題ではありません。経済、産業関係の部署、コミュニティ政策、地域政策を扱う部署、教育委員会などと違う市町村長、都道府県知事に直轄の部署、首長部局での取り組みになります。先程の磐田市も京都市もオリッピック誘致で頑張りました大阪市もそうですが、多くの都市、自治体でスポーツ政策を教育委員会ではなく、首長部局の中の重要な組織として位置づけているケースがあります。こうなりますと、教育の一部分として、生涯学習の中の一プログラムとしてのスポーツではなくなってきまして、地域とのかかわり、経済とのかかわり、人々の生活とのかかわりという点でスポーツをどうとらえていって、どう発展させていくのか、そういう問題を体系的に扱わないとならなくなってくるわけです。そのために組織もきちっとしたものをつくらないといけませんが、その時に、いろいろな模索は自治体がこれからやっていけばいいと思いますが、理論的に、体系的にスポーツと地域の問題、スポーツと経済の問題を考えて整理しておくことも必要だろうと思います。それが今日、テーマになっていますスポーツ政策というものであって、それを研究するスポーツ政策学とまでいけるかどうかわかりませんが、そういう研究体系、研究領域があってもおかしくないのではないか、必要ではないかと思います。

しかし、スポーツ政策、それを研究するスポーツ政策論、スポーツ政策学はまだ発展途上の学問、スタートしたばかりの学問だろうと思います。具体的に地域にどんな取り組みがあるか。実践例、取り組みをしたことによる失敗、成功の具体的な経験を積んでいかないと学問としても発展できない部分があります。今日、この後、ご紹介いただきます企業との関係、スポーツ競技団体がどういう役割を果たすか、そういう視点での整理や経験の蓄積がスポーツ政策、スポーツ政策学の発展にとって欠くことのできない前提条件ではないかと思います。自治体の関係者、地域の人々、そしてスポーツ関係者、スポーツに今まで協力してきた企業、いろんな主体がそれぞれの立場から意見を交わして、スポーツ政策を確立していく、盛り上げていく段階に入っているのではないかと思います。

どうもご静聴ありがとうございました。

【横山】 行政機関でも新しい枠組みとしてスポーツを取り上げ、ブランド化しようという動向とスポーツの重要性についてご指摘いただきました。真山先生ご自身にもスポーツにインセンティブを与えていただくことを個人的にお願いしたいと思います。ありがとうございました。続きまして萩本さんからお願いいたします。

【萩本】 まさか母校でこういう形で講演をするとは思っていませんでした。４年間、ラグビーに打ち込んで、身体ばかり動かしていたもので、学業成績はもうひとつでしたが、こういう形で、こういう立場でしゃべることができて喜んでおります。

私のテーマは「企業とオールジャパンの課題」

ですが、昨年度から始まりましたトップリーグを中心に話したいと思います。その前にジャパンについて触れたいと思います。特に求心力について触れてみたいと思います。99年ワールド杯では、同志社OBの平尾君が監督をしていまして、強化委員長は河野さんでしたが、その時の求心力は情報です。ジャパンに行けば世界の情報が得られる。ジャパンにかかわっている選手、チームに還元されるということで、情報力を求心力にしていました。03年、前回のワールド杯は宿沢強化委員長で向井監督。この時の求心力はオープン化です。プロ化に近いですね。今もオープン化ということで、私が監督になってから春の活動は協会への出向という形ですが、それまでは本当の個人事業主というか、協会と選手が契約してジャパンとして活動していた。そのオープン化によって求心力を求めている。現在、勝田先生、仙台大学の教授ですが、強化委員長で、私が監督です。今回のジャパンの求心力はベクトル、方向性、組織力ということでやっています。日本協会の委員会と連携をとって、すべてジャパンに向けさせて力を蓄えていく。たとえばコーチ委員会ではコーチの情報が一元化されていなかったのをジャパンのコーチングとまとめて、一緒のことをやっていくというようなことです。医科学委員会。選手の健康やフィットネス管理をする。私に鍛えられて怪我をしても、すぐ直して復帰してくる。これによって選手が思う存分に力を発揮してくれています。最後に大学委員会。大学の選手、大学の情報とか選手の選出に力を持っていただいて、これからはここがジャパンにとって大切なところではないかと思っています。

以前ですと、「ジャパンに行かせると下手になる」とか「自分のチームで鍛えている方がよっぽどましや」という声が出たんです。それを出させないためにも、すべてのチーム、すべての委員会をジャパンの方に向けさせることが大切ではないか。それが、次回の07年のワールド杯や11年のワールド杯、これは日本に誘致していますが、ラグビー界の活性化につながったり、日本経済の活性にもなるのではないか。そういう面でも今、頑張っています。現場としては、この春いろいろやってきましたが、現役のラグビー部員の皆さんには耳が痛いかもしれませんが、ジャパンチームとして１つになるということで春は厳しい練習をしました。高校生並みの練習をして、延べ５月18日から７月４日まで52日間のうち43回の練習量で、うちフィットネスが10回、毎日コンタクト練習を入れている。このくらい厳しい練習をすることによってチームが１つに向いていく。現場の仕事だと思います。１つのチームになるということは、なあなあではなく目標に全員が向かっているかということが大切だと思います。現役の諸君は今、日本一に向かってやっていると思いますが、全員がその方に向いているか、一度考えてみてください、説教じみましたが。

地域貢献とスポーツ文化ということですが、まず諸外国のラグビーと日本のラグビーには大きな違いがあります。歴史的背景から言いますと、協会の形成に大きな違いがありまして、英国など欧米は地域社会スポーツから発展しています。ニュージーランド、オーストラリアでもクラブ間の連合から形成されています。特に発祥の地、英国ではパブリックスクールから卒業生たちがクラブを起こしてクラブ化、そのクラブの連合がユニオンとか協会をつくった。一方、日本となりますと、学校教育、スポーツではなく体育から協会、学校間となっています。ラグビーで言うと同、早、明、慶、東大京大の連合化から形成されていった。そこの学校から卒業生たちが企業に行ってラグビーを続けた。今は企業のトップリーグがありますが、トップリーグがメインリーグになっています。しかし現実は大学ラグビーの方が人気があります。同志社の試合の方が神戸製鋼の試合より多く人を集めているのではないでしょうか。学校間から形成されていますから、まだまだ学校間の閥があります。私に監督の要請がきた時、東京の人間がなると思っていたのですが、わざわざ関西に足を向けてくれたという思いで驚きがあったのが実際のところです。協会の形成についてはそういうことです。

今は各国、オープン化になりまして、プロのリーグができています。英国は学校、クラブ、プレミアリーグ、これはプロです。ニュージーランド、豪州は学校はなくてクラブ、スーパー12というプロリーグでやっています。日本は学校、企業、トップリーグ。これはプロではなく企業チームです。規約の中に社員番号がなければだめということで、個人的な契約ではなく会社に契約社員として入っている。基本的には社員で成り

立っています。

さてトップリーグですが、規約の中に、総則としてジャパントップリーグの活動目標というものがありまして、「1、日本ラグビーのトッププレーヤーを強化する。2、日本ラグビーの水準向上に貢献する。3、ラグビーファン拡大の牽引役となる。4、企業のスポーツ振興への貢献。地域との共同によるスポーツ振興を達成する」というものです。その中で我々、トップリーグの各チームは普及活動をどうしているか。私自身はジャパンの監督でありながら神戸製鋼の社員ですので、神戸製鋼がやったことを中心にお話しします。

普及活動としては、ホームタウンの意識を持とうということを言っています。これは地域一体戦略と題しています。神戸、ヤマハはホームグラウンド制を主張しています。ヤマハはジュビログラウンドと言っていたところをホームグラウンドとして試合をしていく。神戸はウィングスタジアムをホームグラウンドとして主張しています。それによって地域の催しを盛んに開催していく。各チーム主催のフェスタ、各チーム春のオフの時、フェスティバルを開催して地域の交流を図っています。同志社大学でも各大学でもされていると思いますが、トップリーグのチームがオフの間にやっています。神戸では10年前からチャリティを兼ねてやっています。もともとは普賢岳の火砕流があった時、収益金を寄付したのが始まりで、他のチームも盛んにチャリティを兼ねてやっています。グラウンドの試合会場で脊髄基金、ラグビーは脊髄を傷めることがありますので、共通する点があるということで、脊髄基金に寄付をしています。

他競技との交流ということですが、他競技のファンを巻き込む戦略として、神戸ではヴィッセルのゲームを神戸のスティーラーズのファンクラブの人と選手が一緒に観戦しています。今後、ヴィッセルがラグビーの試合を見に来てくれるかどうかわからないですが、見に来てくれないと逆にサッカーにとられているのではないかと思いますが、約束ではサッカーが終わり次第、見に来てくれるはずです。オリックスのゲームで始球式をやりました。ウィングスタジアムを使いましてラグビー、アメフト、サッカーの3種の体験イベント、コーチングセミナー等も開いております。ラグビー教室開催、協力、コーチ派遣、子どもと、保護者を巻き込む戦略で、NECは我孫子ラグビースクールに参画して子どもたちに普及活動を行っています。もう1つはタグラグビー、スペースボール。私も関わっていますスポーツNPOシックスで、楕円球に触れることが小学生はないので、楕円球を使ったボールゲームを普及させるために各小学校を回ったりしています。

海外は地域社会スポーツ、クラブという形ですので、地域社会に根づいたところから派生しています。日本は企業や学校ということで、地域とのよい関係をつくり出せていない。やっと今、出しつつあると思うのですが、まだまだつくり出していく必要があると思います。そこで、ラグビーボールを用いたIT授業のコンテンツづくり、兵庫県の教育委員会からの話で、IT を開けばゲームのやり方やコーチングが一度にわかるというコンテンツをつくるために、県下の小学校、中学、高校の巡回指導をしました。神戸市のアスリートタウン構想とタイアップしたり、小学校を母体として地域総合型スポーツクラブをつくろうとしています。今、24くらいできています。そこへの訪問指導も今、考えているところです。ジャパンとしてもこういうことが普及につながるだろう、と。そこで何をしたいか。お母さんの取り込みをしたい。お母さんを取り込むことによって子ども、お父さん、女子ラグビーの普及等につながっていきます。子どもよりお母さんを取り込めたらいいのではないかと考えています。

強化の面ですが、トップ12チーム、国内最高峰のリーグ戦であるということです、トップリーグは。なぜ最高峰なのか。それは12チームに絞り込まれたということです。ニュージーランド、オーストラリアのワールドクラスの選手との対戦が増えています。トップリーグの中で下位2チームは自動降格させられます。その上にチームが入れ替え戦により、ひょっとすると4チームが入れ替わるということで、各チーム、1年目が終わりましたが、本当に真剣に補強を始め、チームの戦い方等も強化されまして、2年目に入って非常に拮抗したゲームが増えています。1年目は代表監督の立場から言いますと、確かに面白いゲームではあったのですが、アタック中心で、50対10とか大差の試合があったんです。今年は30対20とか、これは喜ばしいことです。ディフェンス力がなければジャパンは世界

では太刀打ちできない。ディフェンス力を基盤とするならば、トップリーグでは拮抗した試合をぜひ増やしてもらいたい。そういう意味で、いい形になってきているのではないかと思っています。

トップリーグとジャパンのつながりについてですが、トップリーグの規約で「日本ラグビーのトッププレーヤーを強化する」、もう１つは選手の履行義務として「日本代表へのスコットの参加」が義務づけられました。これによってトップリーグに入っている選手はすべてジャパンのスコットです。因みにオーストラリアでは、スーパー12への参加資格はワラビーズという代表資格者のみの参加という規約がありますが、日本はトップリーグの所属選手が日本代表のスコット候補であるということです。日本のラグビーの理想的なサイクルを言いますと、最高峰のトップリーグが盛り上がり、高いレベルの試合が続けば日本代表の強化につながる。そして日本代表で鍛えられた選手がトップリーグで活躍すれば、トップリーグの盛り上がりにつながる。さらに日本代表が強化され、日本のラグビー日本普及へとつながる。このことは、現実に春の観客動員数が現実に示しています。５月16日、韓国と引き分け。5,496人。これは久しぶりのジャパンの試合ということで5,000人入ってくれた。５月27日、ロシアに勝ちました。6,819人。５月30日のカナダ戦は11,679。ロシアに勝ったことによって増えています。スーパーパワーズカップ優勝と、ジャパンへの期待というのが膨らんで７月４日のイタリア戦、14,125人。韓国戦から比べると勝っていく毎に観客が増えている。日本代表が強くないと日本のラグビー人気につながらない。トップリーグは普及、強化の面で大切なところになっているのではないかと思います。

企業とジャパンは今、いい関係にあります。課題は学生なんです。ジャパンでは、トップリーグのように学生をということは絶対不可能です。今後、大学委員会を通して大学関係者とコミュニケーションを図り、ベクトル、組織力を一緒にしていただきながら、その中で我々ができることは何か。ナショナルメニューの一元化をもって、ナショナルプログラムのデリバリーと我々が訪問しながら会話をしていく。我々が足を運ぶ、時には許されるならば派遣コーチを向ける。あとは、今年の英国遠征に11月行きますが、その前に事前合宿します。代表合宿に大学のエリート選手を参加させる。今回、同志社大学からは選びませんでした。申し訳ないです。今後、ぜひ頑張ってください。そういう形で、学生との関係を密にして、トップリーグ＋学生という形でジャパンの強化、普及を一緒にやっていきたいなと思っています。

最後に同志社大学は21年ぶりの優勝をめざして日々の練習をしっかりとやってください。お願いします。

【横山】　萩本さんは、このシンポに本当に真面目に取り組んでいただきました。お忙しい中、十分な準備のもと、分かりやすい豊富な事例も挙げていただきありがとうございました。それでは次に大八木さん、よろしくお願いします。

【大八木】　私が１年生の時、萩本さんは４回生でした。まさかその20数年前、この二人が同志社大学の立派な建物で、皆さんの前で、お話することになるとは想像もできませんでした。萩本監督は同志社大学で４年間、ラグビーばかりやっていたという話でしたが、実は、私も５年かかりました。１年サバを読まれました。ラグビーのみやっておりました。今回、私もプレッシャー、ストレスを感じるのは、幸いに来年度の総合政策科学研究科大学院に見事一発で合格したということで、横山先生、真山先生から「今日から始まっているんだ、下手こかんときや」と、どえらいプレッシャーをかけられていまして、引退してから講演はかなりやっているんですが、先生方に後ろから見られているということでたいへん緊張しております。

ラグビー協会の普及育成委員という大層な肩書ですが、簡単に言えば、私の顔は子どもが一回見たら、忘れへんやろということです。「ピンときたら110番」かいな。「君みたいなキャラクターが全国中行って『ラグビーええんや』という一言でええ」。じゃ、他のことしゃべったらあかんのかいな。それをやれと言われたんです。

冒頭、アカデミックな話がありましたが、数字を言わないとまずいなと思いますので言いますと、今、ラグビーの競技人口は125,000人ほどらしいですわ。トップリーグの社会人から大学、高校、高専、中学、ラグビースクールまで含めての数字です。ラグビースクールの子どもたちが

25,000人。人気のピークだったのは平成４年やったと思います。上り数字が昭和55年から来たんです。何があったか。同志社大学、大八木淳之も出てました優勝した年です。我が母校伏見工業高校も優勝しまして、高校、大学アベック優勝です。KBS京都が取材に来ました。ドワッと来ました。平成４年まで上り詰めました。平成元年、神戸製鋼スティーラーズ、萩本監督もおられました。Ｖ１、日本一を初めて達成しました。平成５年でガクッと落ちまして、サッカーがJリーグ化、プロ化になった時代です。その後、また上るんですが、15年度がチーム数で3,500、最高のピークの時は平成４年で4,700チームありました。今は昭和57年度と同じ数になっています。高校生の競技人口が少なくなっていると言いますが、前年度と比べるとプラスになっていて、では何が減っているか。社会人のチームとクラブチーム、リストラと経済の不況でなくなっているという状況です。実は高校生のラグビーは上がっている。

私、普及育成委員で何をすべきか。96年から現役ラスト１年目でなりまして、何やろなと。ラグビーというスポーツはマニアックでして、お父さんがラグビーやっていた子どもとか、近所に有名な選手がいる町内会の子ども、近くにラグビースクールがあったらラグビーと出会う可能性はあります。しかしながら、ラグビーに関係ないところで子どもが生まれ育ちますと、全く出会えないというのがあります。講演会等々でPTAのお母さん方に「ラグビーいいですよ」と言うと、「３Kでしょ」と返ってきます。きたない、きつい、危険の３Kですわ。「可愛い一人息子には、やらしまへん」。名門塾に行って、同志社中学に行って、同志社高校に行って、同志社大学に行く。昔は伏見工業高校建築科、同志社大学と言われたもんですわ。今、私は大学院でっせ。３Kということはラグビーの特徴であるコンタクトプレーが何か弊害になっているのではないかと思いました。海外のラグビーの友だちに「何かないのん？」。ラグビーをやっている連中は分かっているんですが、タッチフットラグビーというのがあります。タックル行く代わりにボールを持っている奴にタッチする。そうすると「タックル」とボールを離す。しかしながらラグビーをようわかっている人間でないとできへん。タッチに行くよりディフェンス優位になるということがありまして「何かないのん？」ということです。イングランドから来たマーク・イーガンが、当時一緒に神戸製鋼とプレーしていました。南アフリカに腰に紐をつけてやるラグビーがあると聞きました。今日、持ってこようと思ったらスポーツ店で完売していました。えらい人気なんですね。腰にタグを２本つける。それをとると「タグ」と叫んでタックルになる。南アフリカのあるクラブチームが、味方同士で試合と同じシチュエーションでする時、ほんまにタックルすると怪我するから、それを持ってラグビーと同じようにする。考えられているなと思うのはタグをとると「タグ」と言う。タグはとった人間に直接手渡して、とられた人間はマジックテープを嵌めるまでラグビーのプレーに戻れない。ラグビーの試合に戻しますと、タックルされた方はこけたり、グラウンディングしていまして、その時間の間がございまして、それがタグを渡したり、つけたりするところやなと思います。

97年から全国に広めまして、タグにも私の横顔を描きまして、けど何のロイヤリティも入ってきませんよ。私は特殊なヘアスタイルしています。恩師である岡先生に「何してるんや」と怒られるんですが、上から見るとラグビーボールなんですよ（笑い）。頭の先から足の爪先までラグビーの普及をやっているという現れです。タグラグビーを教えているわけです。どんどん盛んになりました。もともとラグビースクールに好きで入っている連中もいます。新しい連中も入ってきた。来年度はビールがおいしいサントリーがスポンサーになりました。全国大会が来年行われます。一言も僕の了解もなしに、やってはるんです。いずれはモルツ１年分くらい来ると思いますが。どんどん普及しています。

１つ経験談をお話したいと思います。普及活動している時ですが、５、６年前、東京のある下町にラグビーの指導に行きました。小学校の連中は僕の現役の雄姿は知らんやろな、バラエティ入れて、アホなことやっていると思われているやろなと思っていました。ところが、私僕が行くと保護者が一杯くる。最敬礼ですわ。「なんで大八木さんが、こんなチームに来るんやろ」。ビシーッですわ。そこで言われました、コーチの人に。「大八木先生」、先生ですわ。「うちの子どもたち、下町育ちです。大八木先生が気をつけと言うても気をつけしません。人の話を聞けと言

うても聞かへんかもしれません。どうか大八木さん、キレんと」。キレるタイプやと思われているんやね。「最後まで教えてください」。ということで始まりました。

私は、その頃、久しぶりの東京ですから、ラガーマンと前の日に飲んでおりました。日々の練習もさぼっています。汗がブワッと出ます。小学校の３、４年のボンですわ、バーッときて。私はずっと京都でして、大学を選んだのも、アンチ関東ということで、関東弁はムカつくんですわ、こんなガキがしゃべりよったら。バーッときて「大八木先生」、「なんや」、こっちは関西弁です。「先生、練習不足だろう」、「なんでやねん」、「そんな練習してたら汗一杯なんか、かかないもん」と言いやがって、ムカつきますわ。「やれ、やれ」と乱パスとかやらせたんです。子どもはオモロイです。３人同士で来て「見てみろよ、大八木先生、テレビばっかり出て、ラグビーの練習してないぜ」、「うるさい、やれ」。子どもは今度、ほとんど全員が、バーッと私を取り囲みまして「おーい、練習不足や」。そこまで言われたら、正直ものの大八木です、言いました。「全員集まれ」。囲まれました。「ごめん、昨日、久しぶりにビール18本、焼酎２本、ワイン、もうわからへん。飲んでもうた。その汗が出てもうたんや」。こう言うたんですよ。最初に発見した子どもに「悪いけど、この汗を拭くものとってきてぇや」と。その子「ハイ」と言いました。ここからはラグビーをやられた方しかピンとこない話かもしれませんが、何を思うか知りませんが、その子、バーッと来て「大八木さん、かがんでください」。ラグビースクールのジャージ、エンブレムも入っていてね。こうね、袖を伸ばしてね、そこで、僕の顔を拭きだしよったんです。

これ、一般的に考えると、きたないなとなります。実は違います。僕ら、日本代表の時、アマチュアリズムを厳守した時代でした。日本代表になっても一円の金ももらえませんでした。もちろん勝っても何もなかったです。神戸製鋼が日本一になっても、銀座に一回くらい飲みにいったくらいです。一番ラグビー選手にとって奇跡というか、世界でどれくらい戦ってきたかを残すものとしてノーサイドの精神があります。オールバックスでも、イングランド代表でも、試合が終わるとジャージ交換というのがございまして、そのジャージの枚数が多いほど、経験、エクスペリアンスが立派なもんやとされます。もちろん、ラグビースクールの子どもにも校長以下、コーチ陣はこのジャージの重さは話されています。かつて明治大学では、１年生がラグビージャージを洗う仕事の係ですが、上級生がファーストジャージを着る時、電気に照らして砂が入ってへんか、チェックされる時代がありました。それをまち針で１年生がとらないといけない時代でした。非常にジャージには重さがあります。ラグビースクールもそうです。小さくなると次に入ってくる子どもに渡したり、弟に着させたり、ほんまに破れて捨てないといかん時でも、自分のスクールのエンブレムを外して残すというくらいに重さがあります。東京弁でしゃべる子どもがそれで拭きよったんです。お母さんかコーチのところにいってタオルをもらいにいく発想がなかったかもしれません。でも、CAP30、ラグビーをやってきた私にとってのその光景ですよ。「こいつだけは関東弁しゃべるの許したろかな」と、「日本代表になれへんかっても、このスピリッツを守ってほしいな」と、なんかそういうことを思いました。

子どもたちに出会う関係上、世の中を見ると凶悪な犯罪とか、IT情報化時代になりまして、ファミコンでキャラクターが死んでリセットできたら新しいものが出てくるという話があって、そのことを、ほんまの命の大切さを知らん世の中の環境になっているからあかんのや、とついつい僕も言いました。僕らもそんな感じを持ちます。でも、そいつの行動を見る限り、実は、子どもっていうのは、へんな話、江戸時代、大名行列していた時代の子どもも、戦前生まれた子どもも、戦後高度成長時代の、いろんな子どもがいると思いますが、実は子どもの持っているスピリッツは、ハートのきらきらしたものは、案外変わってへんなと感じたわけでして、何が変わったのかなと思うと、その周りにいる最初の大人ですわ。産んだ親、お父さん、お母さん。一歩家出たら町内の大人たちです。バーッと行くと学校の先生、部活動の監督です。その大人が子どもを見る視線が、どんどん時代の変化によって、評価が変わってきたのではないかと、こう思うわけです。ラグビーをこよなく愛してきまして、ラグビーしか知らん私です。何がスポーツ、ほんまにええんかなと思いますと、きっと今の子どもたちに当たり前なことが、当たり前にできる、それを教育できるスポー

ツってあるのとちゃうかなと思います。朝、会うたら「おはようございます」。なんぼ実のお母さんでも、自分のためにやってもろうたら「ありがとう」という感謝の気持ちを込めないといけないことです。12時に集合なら11時59分59秒までに来ないとあかんわけでして、それ以後に来たら社会人、世の中に認められへんということを、スポーツにおいて、私が言うならばラグビーにおいて、そんなメッセージを子どもたちに伝えていきたいなと、こう思うわけです。それが普及育成委員、タグラグビーの１つのメインとなるものです。

もう１つは私の公式ホームページの「大八木ネット」、一回見てください。カントリー大学に留学している時、本当は「淳史（アツシ）」が「アッシー」と呼ばれていました。恋人とか彼女を車で送っていくのを「アッシー君」と言うようになったのはその後ですよ。僕の方が前なんです（笑い）。それはともかく、そこから「アッシーズキッズ」という名前が生まれたんです。ラグビースクールも何もない、そこの先生もラグビーに出会ったことがないところに、とにかくラグビーボールを持っていく。それもハーレーダビットソンに乗って。青森でもどこでも単車で行ったら安いですから。アゴ足全部自腹ですわ。ただ、ボールは３つしか持っていかない。１つ7,800円もしまして。なんぼ僕が言うても割引は15%しかきかない。方々回っている活動をしております。私の今の活動、僕自身が媒体になっていろんなことをやる。日本協会も萩本監督もいろんなことを進めていますが、メディアになんぼ露出するかということで、スポーツの人気が高まることはわかっていまして、SMAPのキムタクがドラマでやってくれるとバーンと人気が上がると思います。どうか、どうか、今日、参加していただいた方が、まずラグビー好きになっていただくことが、ラグビーのファンを増やすことでして、そうすることによって、今の子どもたちに何らかの形でいい方向性になっていくという可能性もございまして、ファンが１人でも多く増えることを希望しております。

私、伏見工業高校建築科を受験しました。その時は、ラグビーをやろうと思って行ったわけでもございません。そこの恩師、スクールウォーズの映画になっていますが、山口義治先生に出会いました。この話はいつもするんですが、そこでラグビーの原点、すばらしさを教わりました。その後、高校２年で、少年の部の長野国体のメンバーに入れていただきました。その時のメインチームは同志社高校やったんです。伏見工業高校から２人入ることができました。その時に、岡先生に会わせていただきました。同志社高校は憧れでした。皆、私服で学校行っていました。僕らは学ランでしたから。伏見工業高校はガラ悪いですから、憧れでして、１か月ほど、一緒に同行させていただいて、いろんなことを教わりました。

１つ、岡先生の思い出話を。大学２年の時、林敏之キャプテンやった時代です。涙の似合う先輩でした。まさしく人生涙一本でした、あの人。準決勝でした。１月２日、萩本監督も出ていました。明治大学で退場になる選手がありました、14対15、12対15で戦うことになって。その前の年は明治大学を破って日本一になったんですが、林キャンプテンの時は残念ながら負けました。あの時、いろんなことがありました。でも、岡先生が次の日、集合で、すばらしいなと思ったのは、僕は林さんとロックで、その指導をしていたのが阿部さんというナンバー８でした。ウィングの人が退場になりました。そこのゴール前で「阿部、お前ら、フォワード。よう聞いておけ。なんで、ナンバー８の位置についてたんや」。分析が始まったんです。「ブラインド守っておかな、あれで流れ変わったんや」と言われて、「こらすごいわ」というのが、僕、ラグビーをやっていまして感じました。ラグビーの原点を教わったのは山口先生でして、ラグビーにおいて人生どう生かしていくかを教えていただいたのが岡先生でございまして、現在、今後、大八木淳之どうするのか。横山先生と真山先生に下駄を預けた状態です。ひとつ、この場を借りて２年で無事卒業できるように、フォロー、サポートの程よろしくお願いします（笑い）。

現役の連中のことですが、一昨日、「チチンプイプイ」の取材で平君を取材に行ったんですが、僕はね、フォワードを見て非常にデカイと驚きました。早稲田とか、ムカつくでしょ。関東学院なんやねん。原口さんはええ人ですが。最後はプライドを持って、萩本さん、平尾、林さんもつくった何か、どこかで、前頭葉の一部に何かインプットしていただきまして、負けはないでという気持ちで、どうか、どうか、今シーズン、ええ

結果を納めて、21年ぶり日本一を、僕も応援していますので、よろしく頑張ってください。後輩の川井先生、お後はよろしいようで、よろしくお願いします。ありがとうございました。

【横山】 ありがとうございました。今日、大八木さんからネクタイ着用かと確認されましたが、普段、締めつけないネクタイまでしてきていただきました。ただ、こちらが用意したネタに触れていただいたかどうか心配で、大学院に行くより、違うジャンルに向いているかなと、心配しております。川井先生、出にくい順番で申しわけないですが、最後、ピチッと締めていただくよう、よろしくお願いします。

【川井】 大八木さんの後ほどやりにくいことはないのですが。今日のテーマは地域貢献ということですが、私が用意しているテーマは地域貢献にかかわってこないのですが、萩本さんと大八木さんのお話を受けまして企業スポーツ選手にかかわる問題と、地域スポーツをめぐる事故の問題の２点についてお話をさせていただきたいと思います。

私の専門の関係で、プロ野球について、この数か月、国民的関心事にもなりましたが、プロ野球では球界再編をめぐる労使紛争が勃発しまして、プロ野球選手は果たして労働者と言えるのかという議論が交わされてきました。結論から申し上げますと、プロ野球選手は団体交渉やスト権を保障する労働組合法上の労働者ではありますが、労働基準法上の労働者としての扱いは受けておりません。一連の議論では、この点について混同があったり、誤解があったように思いました。

労働基準法は労働をめぐる最低条件を設定する法律で、労働時間、休日、契約期間などについて規制するものです。この労働基準法では、現在プロ野球選手についてはその対象とされておりません。と同時に、これと同じ基準で適用される最低賃金法、労災保険法、雇用保険法についても対象から除外されています。その意味では一般のサラリーマンとは相当異なる位置づけにあったわけです。

では企業スポーツ選手はどうでしょうか。以下では労働基準法上の労働者としてどのような扱いを受けているか、またどのように扱うべきなのかについて考えていきたいと思います。なお数年前に、野球、バスケット、ラグビー、バレーボール、陸上、アメリカンフットボールを対象に、労働者性に関するアンケート調査を実業団スポーツを持つ企業に対して実施しました。詳細については正直にお答えいただけない部分もたくさんあったわけですが、企業スポーツの実態をある程度正確に把握することができました。そのポイントは次の通りです。

第１に、各競技団体においては、競技者の雇用形態が相当多様化していることです。第２に、企業スポーツの世界でプロ化が進行していることです。第３に、同じリーグ内であっても企業によって競技者に対する業務としての位置づけが大きく異なることです。４点目に、同じチーム内であっても、プロ、アマ、セミプロというさまざまな雇用形態の選手が混在していることです。最後には、多くの競技者について競技と業務の関係が極めて不明瞭であることなどです。

近年に見られます企業スポーツの顕著な動きとして、プロ化容認を上げることができます。しかしプロ化と言ってもその意味が一様ではありません。メディアにおいてもかなり錯綜しているように思います。以下では便宜上、完全なプロ型とアマ型を対極として、「プロ型」・「ややプロ型」・「セミプロ型」・「ややアマ型」・「アマ型」と５つに分類して話を進めていきたいと思います。

まずアマチュアに対して対極にあるプロ型について。試合の出場に対して報酬を受け、練習場所や時間などについて企業から拘束を受けない競技者の関係です。陸上選手が企業とスポンサー契約を締結し、CM出演をすると同時に、企業のロゴ付きのユニホームを着て試合に出場するというケースがこの典型例と言えます。たとえば、スカイネットアジア航空に所属する陸上の高橋尚子選手はこのカテゴリーに入ると思います。

次に、ややプロ型は競技が契約内容とされ、競技に対して報酬を受け、時間や場所について一定の拘束を受ける競技者であります。ラグビー、バスケット、バレーなどの一部の選手に、この形態がみられます。萩本さんの話にスポーツの世界で契約社員と呼ばれる人々の形態です。

次に、プロ、アマの中間にあるセミプロ型は、一般業務に加えて競技も契約の内容とされて、一般業務とともに競技についても報酬を受ける

競技者です。午前中には一般業務、午後から競技という競技者についてはこの類型に入るものと思います。

ややアマ型。原則として一般業務に対して報酬を受けつつ、他方、競技についても業務的な扱いを受ける競技者の類型です。ラグビー、野球、バレーボールの競技者の多くがこの類型と言えます。

ママチュアの典型であるアマ型は、原則として就業時間外に業務外の活動としてあくまでも自主的に競技を行う競技者です。下位リーグの競技者など、未だ全体としては最も多い従来型の競技者の類型です。

ところで、競技者が労働基準法上の労働者である場合は、この法律の保護を受け、他方で会社は当該競技者の雇用について一定の規制に服することになります。ここでは競技者の労働者性がポイントとなります。その労働者性は報酬の額、支払われ方、時間的・場所的拘束、その他使用者による拘束のあり方などを総合的に考慮して判断されます。労働基準法における労働者性が認められますと、同時に最低賃金、労災保険、雇用保険など一切の適用を受けることになります。つまり、労働基準法の問題だけではなく、労働保護法規と呼ばれる多くの法律の適用の有無が問題となるわけです。高橋尚子選手のようなプロ型の競技者においては、企業における拘束がほとんどありませんので、概して労働者性が否定されることになります。ややプロ型はどうでしょうか。現状では、その多くの競技者に労働者性が認められるのではないかというのが私個人の印象です。ただ、この類型はプロ野球選手をJリーグ選手と比較してみましても、客観的に見るとほとんど同じ働き方になっています。ただ違うのは年俸額です。特にトッププレーヤーは一桁違う。それ以外の働き方についてはほとんど異なるところがないということになります。

こうして見ていきますと、労働者性が否定されるプロ型、ややプロ型の一部の競技者については議論のあるところかと思いますが、セミプロ型以下、ややアマ型とアマ型については企業との関係で労働者性が肯定され、労働基準法や労災保険法などの適用を受ける労働者と言えることになります。

次に、労働者が従事する競技と業務の関係について。具体的には、労働者と言える選手が競技中に競技に関連して負傷した場合、労災の対象となるのかということです。競技中の事故が労働災害と認められる実益は、言うまでもなく保険給付が受けることができることにあります。しかし、これだけではありません。療養期間中は、原則として使用者は労働者を解雇することができないとする解雇制限があることも大きな実益と言えます。一方、家の階段から転げ落ちたという労災にあたらない支障などについては、解雇の理由にすらなりうるわけです。企業によっては温情措置をとるという場合がありますので、一概には言えませんで、法的には保護という観点からは大きな差があるということになるわけです。

では、どのような場合に労働災害と認められるかについて。労災認定の枠組みについては概して次の通りです。まず業務上の災害であることが要件とされます。業務上か業務外かの認定は次の２つの要素によって判断されます。１つは業務の遂行中であったかどうか。もう１つは業務に関連していたか。この２つによって判断します。競技が仕事の内容と認められる限りは、これに付随して生じた事故については労災と見なされる。ただし、客観的には同じような活動であっても、各企業によってとらえ方がまちまちというのが現状です。アンケート調査では、競技は業務命令に基づくものであると回答した企業が多数であったにもかかわらず、実は競技に伴う事故について労災による処理と答えた企業はほんのわずかでした。競技は業務命令に基づくものであるが、競技中の事故を労災とは見なさないというのが現場の認識と言えます。こうした法の規定と現場の認識には大きな隔たりがあると言えます。この点については早急に改善、整備すべき問題と言えます。また競技団体も、こうした問題についてそれぞれの企業に対応を任せるのではなく、一定のガイドラインを設けるべきではないかと個人的には考えています。

ここでは労災の話を取り上げましたが、労働時間とのかかわりについても競技と業務の関係には多くの問題がはらんでいます。いずれにせよ、労働法とのかかわりにおいては、競技と業務の関係を明確にしていくことが今後の課題と言えるわけです。

学校教員によるクラブ活動の指導と業務の関係についても大きな問題があると言えます。あ

とのクロストークで話題になればお話をさせていただきたいと思います。

スポーツ事故の法的責任について、地域スポーツの振興との関係で若干の問題提起を致します。スポーツ事故の法的責任に関する最近のケースを３つほど簡単に紹介させていただきます。

まず１つ目は、ソフトボールにおける参加者同士の衝突事故のケースです。地域住民親睦のために開催された男女混合ソフトボール大会で、次のような事故が発生しました。２塁ランナーの男性が、味方のヒットの際、３塁ベースを回ってホームにスライディングしました。ホームベース上には女性のキャッチャーがいたのですが、女性のキャッチャーと衝突して負傷させたという事案です。女性は膝のじん帯を切りまして、手術と入院が約３か月の負傷でした。このケースで裁判所は、男女混合という状況の中で、スライディングをした男性には注意義務を怠ったという過失があるとし、100万円の損害賠償責任の支払いを命じています。

２つ目のケース。ロッククライミングの練習場において、ある程度の経験者と初心者の２人がパーティを組み、岩登りを練習した際に初心者が転落し、半身不随の重傷を負ったケースです。この事件は、指導的立場にあった経験者が、初心者にロープと足だけで身体を確保する練習をさせるために、岩から両手を離すよう指示をしたのですが、思いのほか、初心者が一気に両手を離して体重を後ろにかけたものですから、上にいた経験者がロープを確保することができずに転落して負傷した。一生看護人がつかなければならない負傷を負ったというケースです。このケースでも、裁判所は、指導的立場にあった経験者に注意義務違反があったとして過失を認定し、4,300万円の損壊賠償支払いを命じています。

３つ目。民間スポーツクラブの指導者が法的責任を問われたケース。民間スポーツクラブで、器械体操の選手として鉄棒の指導を受けていた中学１年生の男子が、難易度の高いトカチェフの技の練習中に頭から転落して負傷し、重い障害を負ったケースです。このケースでは判決は指導上の過失を認定し、コーチらに何と１億3,000万円の支払いを命じています。そういう意味では、子どもたちにタグラグビーを教える大八木さんは、実はこのリスクを負っておられるということになるわけです（笑い）。このように、スポーツ事故については、被害者が直接加害者や指導者に対して法的責任を問うケースが年々増加してきています。裁判所が損害賠償の支払いを認めるケースも年々増加してきています。個人的には、こうした動向が、地域や学校におけるスポーツ振興にマイナスの影響を及ぼすのではないかという懸念を持って見ています。

ところで、どのような場合に誰に法的責任が発生するのか、スポーツ事故責任についての考え方を簡単に整理してみたいと思います。加害者の責任については、民法709条の条文に次のような規定があります。「故意または過失によって他人の権利を侵害した者はこれによって生じた損害を賠償する責任を負う」。わざと不注意で他人に怪我という損害を負わせた場合、加害者はその損害に対してお金でもって補償しなければならないということです。つまり、わざと他人に怪我をさせた場合はもちろんですが、不注意で怪我をさせた場合も法的責任を負うことになります。

では、スポーツ事故で問題になるのは、どのような場合に不注意があったか、不注意があると見なすべきか。この点についてラグビーを例にとって考えてみたいと思います。たとえば、タックルで相手チームの選手に重傷を負わせた場合はどうか。あるいは死亡させてしまった場合はどうか。ここにおられるほとんどの方は、タックルをした選手に法的責任を課すというのは不当だと思われると思います。タックルをした選手が損害賠償責任を負うことは、ラグビーというスポーツそのものを法律が否定するということになってしまうからです。このような観点から、裁判所は次のように判断しています。「そのスポーツのルール上、許されている行為によって事故が発生した場合、加害者は法的責任を負わない」。では、逆にルール上、許されていない行為によって事故が発生し場合、加害者は法的責任を負うことになるのでしょうか。

試合中の乱闘などによる事故については、加害者にその責任を課すことに異論がないところかと思います。では次の場合はどうでしょうか。ラグビーでは腕を相手の選手の首に巻き付けるタックルを危険なタックルとして禁止しています。ペナルティキックの対象としているわけです。こうしたタックルは、ルール上、許されてい

ない行為と言えます。仮にこのようなタックルを受けて、選手が重傷を負ってしまった場合、死亡してしまった場合にタックルをした選手がその法的責任を負うのか。たとえば、自動車事故については、交通ルールの遵守義務を始めとして前方不注意、前方注意義務など、およその注意義務の範囲が我々にも見当がつくということになりますが、スポーツ事故については、その注意義務の範囲について見当がつきにくいのが現状です。裁判所が言うように、ルールに違反した場合には法的責任を課して、ルールに違反していない場合には責任を否定するという判断基準はわかりやすいものですが、これも必ずしも適切な判断とは言えないと思います。というのは、ルールで禁止されペナルティの対象となっているタックルの行為も一応ラグビーというスポーツに付随するものであります。これらの行為によって起こる事故について加害者に責任を負わせていくことは、ラグビーというスポーツの本質を失わせることになるからです。しかし、だからといってスポーツ事故については、一切責任を問わないということも私は支持することはできません。

このように考えていくと、結局、加害者の法的責任を肯定するか否かの基準については幅広いグレーゾーンを存在させてしまい、極めて曖昧な判断を容認することになります。この判断基準の問題はスポーツ振興に深いかかわりを持っていると言えます。指導者の責任についても同様の問題となります。指導者に高度の注意義務を課すことになれば、指導者への事故責任への負担が増大し、そのリスクの高さが、特にボランティア指導などのインセンティブを阻害することになるからです。このようにスポーツ参加者や指導者、それぞれに課される注意義務の程度がスポーツ振興に大きく影響するわけです。

また、事故の責任の判断基準が不明確であればあるほど、責任関係が不明確となり、かえって事故のトラブルを発生させる環境をつくってしまうことになります。ではどのような注意義務を課すべきなのか、この点については海外での議論も視野に入れながら、今後、適切な判断機銃を模索する必要があると思われます。またこの議論に平行して、そもそもスポーツには不可避的な事故が伴うことをもっと正面から認識すべきではないかと考えます。これまでスポーツ事故はしばしば不運な出来事としてとらえられて、その後の条件整備が不完全なままに放置されてきたということも否定することができません。自治体が主催するイベントからも、事故発生率の高いイベントは徐々に姿を消してきたという声も聞かれます。もちろん学校の活動についても同じことが言えます。真のスポーツ振興を実現させるためには、各スポーツの本質的な危険性をもっと積極的に認識し、不可避的な事故のリスクを事故の当事者のみに負担させるのではく、このリスクをスポーツ参加者全体に分散させるという発想が重要となると思います。つまり、潜在的な事故の当事者がこのリスクを分担しあうことによって被害者に対する救済の機能を高めると同時に、加害者の法的責任を軽減させ、スポーツ事故をめぐるトラブルを回避させることが地域スポーツの振興において極めて重要になると考えられます。

事故の防止をするために何をすべきかというのが第１点。そして起こった事故について何を根拠に、誰にその責任を負わせるか。最後に事故のリスクをどう分散させるか。この３つを地域のスポーツ振興を念頭におきながら今後考えていく必要があると思います。最後に実は先日、岡先生からご指摘を受けたのですが、学校の施設を、地域住民に開放していくという、学校開放という言葉を非常に最近は耳にしますが、学校開放の動向についても今の事故の法的責任、管理者の注意義務が大きく影響してくると思われます。

【横山】 ありがとうございました。一般社会と今までは切り離されていて、スポーツ社会は区分社会だということですが、そこに法律がどう関与していくかということが今後ますます問われるということでした。大八木さんの後ということで、少し固い目にまとめていただきました。ありがとうございました。

【クロストーク】

【横山】 それでは再開させていただきます。クロストークの後、会場の皆様からご意見をいただきます。先生方の各論は大変面白いお話だったと思います。テーマとの関連で、地域貢献とい

うことにスポットを当ててクロストークをしていただければと思います。

３つのキーワードがあると思います。勝ち負け、競技力が１点。そのためには人も多くいなければいけない。普及もしなければいけない。２点目は普及。それをエリア、地域に発信したらどうか。そして、地域貢献。この３つがキーワードかと思います。普及と地域貢献は結びつきやすいかと思いますが、競技力と普及、予算配分、人の配置、普及に行く時、たとえば、大八木さんが現役の時、普及に行けたのか。選手は競技力向上に努めないといけない。普及面から言うと、有名な選手が一人来てくれれば、いろんな人が100万言費やすよりインパクトが強いのも事実です。となるとそこはどう関連するか。地域貢献、競技力を上げることが地域貢献にどのように結びつくか。この３つの兼ね合いを各先生方、どのようにお考えか。さらにお二人の先生は理論面、学問的な立場からの提案。お二人は実践面、そういうけれども現場ではこんな苦労がある。それには行政からこんな手助けがほしい、法的にはこういうことをやってくれればやりやすいということも含めて、ご議論いただければと思います。大八木さんから最初に口火を切っていただきたいと思います。どこからでも結構です。

【大八木】 今、１つ大きな問題になっているのは、トップリーグです。川井先生のジャンルでは「ややプロ型」ですが、実際問題、辞めていく選手がどんどん増えてきまして、契約社員という制度で終身雇用制ではないわけです。その彼らのセカンドキャリア、次のライフステージに、まずは普及ということをテーマに持っていただいて、地域貢献の中で指導等々をという要素はあると思います。

【横山】 そのことについては、Ｊリーグがキャリア・サポート・センターでやっていますね。プロスポーツとしては後発で仕組みを見た上で、野球界とかの動きを見た上で、目配りはされていると思いますね。実際問題、セカンドキャリアについてはセンターをつくって専任を３人おいて、企業の窓口などの役割を果たしていることは聞いております。ただ、普及面、学校現場は日本でのスポーツ普及における大きな装置だと思いますが、例の資格、教職免許とか教育委員会との関連が出てくる。大八木さんがされる場合に、学校現場でのご苦労をお話いただければ、真山先生には地方行政の立場からどういう枠組みになっているかということで。

【大八木】 ラグビー協会として、ある学校に行く場合と個人的に行く場合とでは違うんですが、感じられるのは学校長以下教頭先生がラグビー好きであるかないかに大きく左右されまして、ご理解があるところに行くと大歓迎です。ご理解ないところは「怪我したらどうする。誰が責任とるねん。」というのが公立の小中にはあるんちゃうかな、と思います。いきなり行って、タグラグビーでひょっとして接触して事故が起きる可能性もありますから、そのへん怖いなと、温度差はあるなと実感していますね。

【横山】 真山先生、週休２日制になりまして総合学習とかの文部科学省の取り組みの中で、スポーツも教材の１つになるだろうと思いますが、大八木さんのご指摘では、決めているところは行政の仕組みではなく、個人の感情、好き嫌いで、採用、不採用があるということですが。

【真山】 たしかに、学校には管理責任者としての学校長がいて、その上に教育委員会があってということで、管理の厳しい組織であり、仕組みになっているのです。子どもを預かっている関係でいい加減なことはできない。教育機関であるという伝統的な認識が前提になっていますので、やむをえないと言えばやむをえないのですが、スポーツの普及とか、スポーツ振興となった時には、学校の施設を活用することが地域では重要になってくると思います。そこで、教育機関としての学校と、学校の施設や建物とグラウンドを切り離し、分けてやらないと、地域で自由に学校の設備を使っていくことが難しいのかなと思います。その部分で、学校は整理がついてないんです、概念とか仕組みで。学校を１つの足掛かりに、総合型スポーツクラブをつくろうという動きがありますよね。それができて施設の利用などもスポーツクラブが主体的に使えて、管理責任も負うという仕組みができていれば、そこを経由する、そういうルートも１つありうるかなと思いますが。

【横山】 川井先生、その時、管理責任が大きなネックになっているということだと思いますが、法的にはいかがですか？

【川井】 真山先生がおっしゃったこと、１つにはそれが解決方法になるかと思いますが、愛知県の知多市にまちづくり保険という制度、最近の話ですが、市の関係で行った活動については広く保険をかける。税金でかけている。スポーツにかかわらず、生涯学習、NPO の活動とか、市民が公の活動をする場合、家族ではなく社会的活動で生じたことには広く保険の対象とする。個人的に問題視しているのは、傷害保険と損害賠償保険の２つが混同されている部分が現場にあるかと思いますが、問題としたいのは加害責任をできるだけ軽減させていきたい、それがスポーツの発展につながっていくのではないかと考えています。過失があった加害者の方の責任について保険の仕組みが充実しているんですね。１事故について５億までだったと思いますが、一人について１億、総額で５億まで、かなり保険としては今までにないようなサポートをしているのが見受けられましたので、そういう方向も１つあるかなと感じます。

【横山】 ボランティア精神でやっていても、最近は追及を受けたりとか、大八木さんはそういうリスクを背負っているのだ、と。ご自分では地域貢献をされる時、そのへんはどのようにお考えですか？

【大八木】 傷害保険というの？　年間何千円かの。

【川井】 学校保険ですね。

【大八木】 基本的に入っているという前提で。

【川井】 子どもが怪我をした場合はその保険でいけるんですが、大八木さんが、その子どもの足を踏んでしまった場合には大八木さんが損害賠償責任を追及されるわけです。

【大八木】 それは出えへんの？

【川井】 子どもが入っているのはあくまで子どもの怪我という自分の保険ですから、大八木さんが加害者になった場合の保険はサポートされていない。１億のリスクを負っておられるんですね（笑い）。

【横山】 萩本さんは一元化をキーワードにしてナショナルプログラムをデリバリーする、と。派遣コーチだ、と。京都市でも中学でバレーボールが好きなのに顧問の先生のなり手がいない。要望が強くて校長先生が理解のある先生だと派遣講師を呼んでくる。ただ、ペイも少ない、保障もないということですが。

【萩本】 日本の中で公認されたコーチレベルシステムはないんです。今、ようやく活動を始めて私も上級を受けている最中です。それをとることで日本のラグビープログラムをレベルに合わせて教えにいける。

【横山】 公認コーチ制度ですか。日本体育協会の発行の？

【萩本】 ラグビー協会自体がやりだして。世界の IRB とマッチングさせて、それをとることによって IRB のコーチングライセンスも取得できるという、ようやく動き始めたんです。

【横山】 ラグビー関係者の質的、社会の基準に合わせるような制度化だ、と？

【萩本】 それを引退した人間が取得していれば、協会として公認コーチとして派遣がなされていけば、ナショナルプログラムの普及とセカンドキャリアを獲得する人間も増えるんじゃないか、と。

【横山】 対象となる受け皿、高校、大学とか、受け皿環境はどうですか？

【萩本】 文部科学省が学校体育から地域社会体育に移すということを、すでに言ってますよね。それがなされていないので、そこから動かないと。

【横山】 営業に行かれるわけですか。「こんなのどうですか」と。

【萩本】　営業に行ってるんですけどね、僕は。

【横山】　現実はいかがですか？

【萩本】　ラグビーとしての受け皿は個々ベースだと思います。それを行政の方にアピールしていき認めもらう。行政の人と話をした時は、「大八木さんやら、平尾さんから発信してください。マスコミを使って。我々のベースで上に上げていくのはなかなか難しいので、知名度が高いラグビープレーヤーからダイレクトに発信していってくれ」と言う。

【横山】　スターとか有名性は求心力がありますから、普及とか地域貢献には即つながるかもわかりませんね、要素としては。真山先生から行政は主導できないんだというお話がありました。業界がもっとアピールしてくれれば働きかけはできるのだということは、その通りかと思いますが、では、なぜ行政主導でスポーツを使った地域貢献を前面に出して施策として展開できないのでしょうか？

【真山】　スポーツが一部の地域では活性化などに使われ始めていますが、全般的にはスポーツは１つの政策領域として確立されていない。学校でやっていることであり、体育の一部分かなというくらいの理解です。スポーツの話を持っていっても、校長先生が理解があるかどうかと同じように、担当者レベル、首長が熱心かどうかで決まる、こういう程度にあるのは事実だと思いますね。それと、ラグビーという種目で話を持っていく時、ラグビーというのに対する理解は個別の競技ごとの理解度に左右されていると思います。文部科学省が推進している総合型で多様な種目をというのは、地域の人々の好みはいろいろあるし、やってみたいスポーツもいろいろあるので、ラグビーだけ、野球だけというと「ちょっと」と、自治体としてはなってしまう部分があるのかなと思います。競技間の連携も少し考えないと地域に入っていくのは難しいケースが多いかなと思います。

【横山】　スポーツの分野ではそれがなかなか難しいですね。共存共栄は理想だと思いますが、競争社会なので、萩本さんのようにサッカーファンを取り込むというのが、逆にサッカーに取り込まれるのではないかという競争原理が働いてくるんですね。それをまとめて行政が取り上げるのは、今のところ難しいということですね。

【真山】　磐田市とか、そこにもともと強いチームがあるとか、この町はラグビーの町釜石とか、イメージが固まっているところは押せるのです。ところが、これから新たに何かという時、「なぜラグビーなの？」という説明が地域の人に対してうまくできないのです。説明できる何かがあればいいのですが。それがないので、スポーツといってもいろんなスポーツ全部は難しく、入り込みやすいという意味で、危険性が高いものはできるだけ避けて、ニュースポーツとか軽くて誰でもできるものからというアプローチが多くなるんですね、どうしても。そうすると競技団体などは、側面的に関わるしかないというジレンマがあるのかなと思いますね。

【横山】　総合型地域スポーツクラブ。文部科学省が税金を使って、顧問のなり手がなくて、なかなかスポーツ振興ができない、そういう地域にクラブをつくっていこうということを10年計画で進めていまして、今、４、５年経過している。現実は、モデルとして助成がある時は成功した例も多々あったんですが、なくなりますと継続が難しくなる。１つの大きなポイントは受益者負担ということで、今まではスポーツというのは学校でタダでさせてもらう、企業でも採用されてタダでできる。スポーツはタダなものだという発想だったのですが、そうじゃなくてスポーツの恩恵を被るからその人たちがお金を自分で出すというのを文部科学省が広げたい、と。逆にそれがネックとなって広がっていない。神戸製鋼がある兵庫県は、文部科学省が言うのは中学校区に１つですが、それを拡大して「スポーツ兵庫21」ということで、小学校区で兵庫県の予算を使って、小学校レベルでスポーツクラブをつくりたい時には半額を出すし、クラブハウスも建ててもよいというのを推進しています。今日のテーマとぴったりの事例かと思いますので、先行している例についてお話ししていただければと思います。

【萩本】 神戸市は小学校を母体として地域型総合スポーツクラブ、もともとやっていた学校開放を発展させているんですね。息子の小学校で理事をしていますが、一度出たきりで出ていないんですが。少年野球、バトミントン、卓球、インディカの活動があったので、一気に引っつけて兵庫県の補助金もらってクラブハウスを建てるということをやっています。24団体ですかね、神戸市では。それを発展させようとして各スポーツクラブで旗をつくろう、と。兵庫大学芸術学部とタイアップして学生が旗をつくって士気高揚というか、そういうことです。

【横山】 それとラグビー、ジャパンの強化とか、そこから裾野が広がってくればいいということですが、そんな先の長い話はしていられないとは思いますが。

【萩本】 訪問して、「タグラグビーでもいい、ラグビーボールを使った球技をやらせてくれ」と言っています。チケットを配って、見にきていただければ、多分、ラグビーの勝ちやと思うんですよ。特に女性はそうだと思います。格闘技好きでしょ。プロレスにはまっていくような女性も多いので。

【横山】 なるほど、お母さんがターゲットだというのは的をえた戦略だと思います。アメリカでフットボールが一時下火になった時、女性がターゲットだと戦略を立てて今のアメフトの人気のもとになっていることは紹介されていますので、日本でも女性の時代だと言っていますから、大きな戦略だと思います。大八木さんは、タグラグビー普及の中で兵庫県の動きとのからみはいかがでしょうか？

【大八木】 コーチ制度ができたというのは今日、初めて聞いた話で、そういうことがめちゃくちゃ多いんです。

【横山】 知らないことが多すぎると？

【大八木】 情報公開がなかなかできないとこらへんも問題です。もっともっと参加したいOB連中もおると思うんですが、情報が行っていないということをいつも思うんです。お母さん方にPTAで出会う機会が多いですが、頂点がわかりにくい、ラグビーは。我々の頃は「工業高校でも同志社大学に行けるで」と。

【横山】 わかりやすい。

【大八木】 同志社大学に行ったら一部上場企業に行った、そこそこ部長くらいまで行けるのと違うのん。出向して、家を建ててマイホームで４人家族でシャンシャンですわ。今、何となく見えへんようになってきてまして。野球やったらイチローですよ、松井ですわ。サッカーやったら中田英寿とか年俸なんぼもろうているか、わかるわけですよ。

【横山】 なるほど。

【大八木】 そのへんがラグビーのリスクで、大畑選手が今出川歩いていても、どうやろ、わかるかな。

【横山】 それは大八木さんほど、わからないと思います。

【大八木】 そういう感じなんですね。

【横山】 だから何をおっしゃりたいかというと、情報を開示せよと。

【大八木】 もっともっとスタープレーヤーもつくらないかんし、裾野としてはいろんなスポーツをやらせることは大切なことやし、地域クラブが発展したらいいと思うんですが、せっかく日本にあらゆるスポーツがあるので、個性的なクラブもほしいですよね。

【横山】 スターは生まれるのか、つくるのか。

【大八木】 生まれない状況ですもんね。地上波、チャンネル回してもラグビーの放映はなかなかやらない。やっても深夜２時とか。

【横山】 それは確かにあると思うんです。地上波でやるのが一番の方法でしょうね。

【大八木】 日本ラグビー協会は、衛星放送権に

移した瞬間に地上波はしないわけですよ。そのへんもね。トータル的にコーディネートする人がね、平尾誠二がやるんかなと思うたら、途中でクビになりましたし、今頃また復帰するとか、わけのわからんことをしてるんです。

【横山】 平尾さんは今、おられないので、横に萩本さんがおられますから、直接バトルを展開していただければいいかと思います。

【大八木】 萩本さんが頑張っていただくと。

【横山】 萩本さん、頑張れということですが。

【萩本】 大八木が一番、歩く広告塔で。別の協会つくったらいいのと違う？

【大八木】 テコンドーになりますやん（笑い）。上からいったらいいのと違う？

【萩本】 僕はできることからコツコツ。

【大八木】 監督の立場からメディアを動かすとか。

【横山】 それは重要なご指摘ですね。そういう意味では地域貢献につながる話なので、日本ラグビー協会、ジャパンの監督は誰が決めてとか、どれだけの権限があるんですか。

【萩本】 誰が決めたか、わからないんです。

【横山】 そのへんの仕組みが、対比的に見るとサッカーより情報開示が遅れていることだという大八木さんのご指摘ですが。そのへんはいかがでしょうか。

【萩本】 その通りやと思います。協会にある閥ですかね。

【横山】 日本社会どこにもあると思いますが。

【大八木】 ラグビーには、腹括る人がいないんですよ、川口キャプテンみたいな人が。失敗したら誰かの責任にしよう、成功したら俺やでという。

【横山】 わかりやすい話ですが。

【大八木】 CMでもありますやん。誰かが「ハイハイ」言う。「イマイチやな」と言うと「この子です」と。あれなんですよ。あれがアマチュアなんです。

【横山】 大八木さんはプロだから、そういうことはしないと？

【大八木】 腹括ってますよ、僕は。子どもの足踏んでも（笑い）。

【横山】 １億円払っても（笑い）。

【萩本】 儲けているやん（笑い）。

【大八木】 儲けてへん。何の話や（笑い）。

【横山】 そこはすぐには解決できない問題だと思いますが、情報開示やメディアの活用とかが地域貢献にも重要だということです。限界もあるということですが、行政が手助けする、各行政によって取り組みが違うとのご指摘でしたが、現場に向けて、こういう点を考えたらどうかというご指摘があれば。

【真山】 ラグビーの普及をする、ラグビーの知名度を上げることを積極的にやっていかれると「なぜラグビーなのか」という説明がいらなくなってしまうんですね。サッカーはJリーグができて人気がある。「我が町はサッカーのＪリーグを誘致して、Ｊに登録できるクラブをつくって」という話をしても、「あ、そうか」と思うんですが、そこにラグビーというものを持ってきた時、皆が「エッ？」と思うんでしょうね、現状ではまだ。ラグビーだけではないですが、他の競技も日本が強く、オリッピック、ワールドカップレベルで活躍すると、そのスポーツを地域に取り込む説明が不要になるくらいの知名度があればいい。普及していただくのも重要ですが、強ければすべてが解決するという部分もあるのかなと思います。地域は強いものに憧れる部分がありますのでね。そのへんの努力と普及との二本立てですよね。無理難題でお願いする感じですが、地域

も協力、乗っかりやすい面はあるかと思います。

【横山】 同志社からお２人、今、ご指摘いただいた両側面の第一人者が出ているということなので期待できると思います。川井先生から、こういうことを考えたらどうかということがあれば、ご提案いただければと思います。

【川井】 ２つお話ししたいのですが、メディアの活用の話で。イギリスではサッカーも有料のテレビ放映に変わっていますが、国際試合、重要な試合についてはタダで地上波によって見る権利があるんじゃないかという議論があります。日本ではそういう議論はなくて、マードックはどう考えるかと、協会がどう考えるかという商業ベースだけで判断されています。欧米に目を移しますと、国民が見る権利があると言えるくらい文化的に発達している。そもそものスポーツに対するとらえ方が違うなという印象があります。

もう１つ、提案というか、どのようにお考えなのか、大八木さんと萩本さんに伺いたいですが、プロオープン化という形でトップリーグが主導していますが、冷や水を浴びせる形になるかもしれませんが、契約社員という形で年限をきった選手が出てくる。これまでは企業で終身雇用を前提としてプレーをやるが、引退後は企業に戻って仕事をする場が与えられていた。それが価値観の多様化とかありますが、プロ化、オープン化という形で契約社員になる人たちが出てきた。非常にリスクがあると思うんですね。このリスクもプロ野球選手のように金を稼ぐという形では、その後、ある程度次の見通しがつくわけですが、今のラグビーではそこまでは金額は払われていないと思いますので、契約社員の形を持ってくることで、逆に地に足をつけたラグビーの普及は危なくなる可能性はないか。

もう１点は、同じチーム内にプロ的な選手と、そうでない選手が競合していくこと。それ自体がフェアプレーということではないかもしれません。しかし、ある程度、過渡期において認める必要もあるかもしれません。現場としてはどのように認識されているのか、できたら伺いたいのですが。

【萩本】現場として、後者の方は混在させたままです。神戸製鋼も契約社員制度を去年から取り入れています。契約社員は朝から練習できる。そうでない人間は終わってから、または３時くらいからということで、確かに差別化はあります。このへんは会社としては契約社員ですから、その仕事はラグビー競技です。一般社員はラグビー競技の前に会社に貢献するのが仕事だということで、会社としては、「ラグビー部としてはお互いに会社に貢献しているやないか」という見方はしています。ただ、レギュラーになる確率で言うなら契約社員の方が優位です。まだ他のチームも取り入れて２、３年ですから、これから整備されてくると思います。

【川井】 レギュラーになるためには契約社員の方が可能性が高いとなると、将来をきちっと考えずにプロに行くことは危ないことだと思います。

【大八木】 今はターニングポイントなんです。そういう連中は一部のトップのところに入らへんかったらええわけです、僕から言うと。アメリカのＦＬみたいにチームを限定して、神戸市は神戸市、神戸製鋼もごっちゃにして、ワールドの広告もありーの、神戸製鋼の広告もありーの、年間何十試合と決めて最低年俸も決めてやるしかないんですね、格闘技的要素の競技は。日本で一番もらっているのは誰やというのがわからない。皆、言わないから。年間3,000万円もらっている奴いないと思う。10年やっても３億です。それでクビをきられたとき、まあまあかなと思いますけど、1,200万円で10年やって１億2,000万円です。終身雇用制だと２億何千万で普通のサラリーマンとして稼げる中で、リスクは多いし。

【横山】 大八木さん、数字強いですね。

【大八木】 商学部ですから（笑い）。

【横山】 失礼しました。

【大八木】 そこなんですね。トップの動向、今、丁度、過渡期、どうなんのやというのが楽しみであり、不安であり、どうするのんということですね。

【萩本】　外国がオープン化してザーッと流れたせいやね。リーグ戦から何から、日本はその下地がないのにトップリーグが、企業がいい選手を集めたいばかりにそういうことをしてしまったというのが、今、問題点が出てきているところです。これからトップリーグ間で移籍なりも起こるでしょうし。

【横山】　見切り発車をされたと聞きます。

【大八木】　乱暴な話であるというのは、東芝とかサントリーとかが「君ら社員なんや」ということを言うて雇用するわけですよ。でも実際、ラグビーの現役時代は仕事なんかさせませんよ、ラグビーで勝つために。その代わり「お前、終身雇用で、あと面倒みたるやんけ」という話、それを今、学生なんかに問われるわけですよ。最初から10年、プロとしてやるんか。丁度そのへんね、リクルートサイドとしても、うまく帳尻をあわせているという。

【横山】　年俸とか具体的な数字を示さないで、そういう話になると？

【大八木】　何の話か忘れましたけど（笑い）。

【横山】　数字の話です。

【萩本】　会社として契約でラグビーだけやっていくことと、仕事とラグビー、両方の評価をちゃんとしてくれる企業であれば、軋轢は少ない。だけどその評価がなくて、「お前は競技」、「お前は仕事やな。ラグビーはどうでもええねん」というのが今、ごちゃごちゃになっている。

【横山】　それでね、地域貢献ということで、企業も企業市民だという考え方があり、どんな営業所も工場も当たり前ですが地域にあるわけですね。スポーツが入ってないので問題ですが、そこではメセナをやっていまして。神戸製鋼もいろんな部署をもっていますよね。そこでのラグビーを使っての地域貢献と神戸製鋼の部員の関係はどうなるんですか？

【大八木】　トップの理解度だと思いますね。サントリーのように最終プロダクツを販売しているところは、最後、ラグビーで得た名声を営業に使えるわけですよ。神戸製鋼、チタンの単価が高いというても、トン当たりなんぼ、それをね、商社に行って「大八木さんが来たからチタン買うわ」とか、そうはいかんわけでして。ワールドとかサントリーとか、明るい未来の東芝とか、NECとは全部最終商品があるわけですよ。チタンは高いですよ、加工もしにくいけど。

【横山】　すぐ買えない。

【大八木】　そのへんの問題もありますよね。

【横山】　こういう話をするとスポーツはまだまだまな板に乗っていない、他の社会の出来事とか仕組みとか、まだ発展途上だと思いますが。

　明るい話題に行きましょう。こういうことがスポーツの可能性としてあるのではないかということを出していただいて、会場からご質問をいただく。大八木さん、子どもとのふれあいで、「こういう手助けをしてもらったらもっとやりたいことが実現するんだよ」ということがあれば。

【大八木】　タックルダミーというのがありまして、ハンドダミー、これをラグビーをやったことのない小学生に持ち込むんですよ。男の子も女の子も関係なしに、ぶつかりにきよる、ワーッと言って。そういうことが世の中で、体育の授業でもないんかもしれない。川井先生がね、それで「ボキッといって、大八木さん、大丈夫？」と言われると何か不安になるんですね。また暗くなってすみません（笑い）。

【横山】　川井先生、暗くなるご指摘ではなくて、これだけあれば法的保護があると。

【川井】　リスクを分散できるような保険にちゃんと入られるとか。

【大八木】　保険屋のまわしものみたいな（笑い）。

【川井】　それで１つは解決できるかなと思います。

【横山】　法的保護と行政の支援をいただくとい

うことで強引にまとめさせていただきます。クロストークはこのへんで終わらせていただきまして、本日、会場にはたくさんお集まりいただきましたので、今日のテーマと直接関係しなくてもラグビー固有のご質問でも何でも結構です。ご自由にどうぞ。

【会場】 同志社大学私設応援団として、花園のサンタクロースとして、10年以上同志社ラグビーを応援しているものです。萩本さん、大八木さん、川井さんにお願いです。私は京都という地域、伏見に生まれて縁もあって萩本さんが優勝された時、例の退場事件、大八木さんの３連覇、平尾さんと伏見工業で優勝したシーン、テレビで小さい時から見ていました。同志社が90年代に入り、毎シーズン、強いと言われる時も弱いと言われる時も少なくとも５試合、10試合以上、同志社ラグビーが本当に好きなのでずっと勝手に応援しています。実は、85年に大八木さんたちが優勝された同じ年に阪神が優勝しているんです。その阪神が去年、あの阪神がリーグ優勝したのを見て、そろそろ同志社にも優勝してほしいなと思っています。今シーズン、中尾さんの下、学生の皆さん、私は早稲田、関東に勝って優勝してくれると信じているんです。信じているんですけど、万が一、今年優勝できないことがあれば、OBの方々の意見もあるでしょうが、日本ラグビーのために頑張っていただくのもありがたいんですが、この同志社のためにヘッドコーチ、フォワードコーチ、川井さん、バックスコーチとしてご登場いただける？

【横山】 その可能性について聞きたいと？

【会場】 はい。そういうことはあるんでしょうか？

【横山】 ３人の方からどうぞ。

【萩本】 時々、田辺に行かせてもらっています、依頼があれば。依頼がなくても「行け」ということですよね。今、中尾監督以下、頑張ってはるので、イズムを浸透させてもらって、その中で依頼があれば、私のノウハウなり入れさせていただきます。

【大八木】 なかなかね、熱心に、実は皆、仲悪くてね、なかなか行きにくい、ウソですよ（笑い）。敷居が高くてという表現はまずいんですけど、時間があれば行くようにしたいと思います。監督が圓井から中尾に移ってく中で、いいチームになりつつあるのでね。どうか１つ、そんなこと言わんと、もしものことがあっても、サンタクロースが浦島太郎になるのかしらんけど、ファンでいていただきたい。現役の方もこういうファンがいるということを知ってもらって、頑張ってほしいと思います。

【川井】 私は４月から同志社大学に移籍してきたわけですが、まだまだ慣れないことばかりで、ラグビーの方にもご迷惑をおかけして、「できたら来いよ」と声をかけていただきますが、実力もついていきませんので、とりあえず、まず足もとを固めて、できる範囲のサポートをさせていただきたいと思います。またサンタクロースも今後ともよろしくお願いいたします。

【横山】 サンタクロースさん、同志社のラグビー部の魅力を一言でおっしゃってくださいませんか？

【会場】 一言で？

【横山】 何が同志社ラグビーはいいんでしょう。

【会場】 自由なラグビーです。

【横山】 はい、ありがとうございました。他にご質問。

【会場】 スクールで子どもを指導しております。大八木さんが言われたように小学生のタグラグビーの全国大会があるということで、我々もスクールから参加しようと日々練習しておりますが、協会からかサントリーからかわかりませんが、今回はスクール単位ではなく学校単位であるとのことでした。我々としてはスクールでタグラグビーを含めて練習していますので、行政の問題、学校との問題、東北とか九州では学校でタグラグビーの授業を取り入れてやっておられるところは多いと思いますが、ラグビースクールをやっている側からは組織的に練習していま

すので出たいです。今回、初めてということで学校単位という幅広い、タグラグビーを経験したことがない子どもも参加できるようにと聞いていますが、スクールと学校とのかかわりについてお聞きします。

【大八木】　学校単位で参加しないといけないという話の問題点はわかっていますが、冠大会をつくった瞬間、ドッヂボールもそうですが、勝利至上主義になるのは見えているんですよ。それが協会にサントリーがスポンサーについたということで、新聞見て「全国大会があるんだ」と、そんな情報公開なんです。そんなレベルですわ。トータル的にコーディネートして考える連中がおらんのです、まだ。協会はまだ進化しないとあかんと思いますが、ラグビースクールの皆さん、時間を割いてボランティアでやっている大事な部分を残しつつ、うまくバランスを考える誰かがいないといかん。うちのNPOシックスというラグビークラブチームですが、あえて小学生は集めていない。その理由がね。

【萩本】　集めていないのは、既存の地域社会クラブとしてラグビースクールは30年近く歴史がある。根づいている。新しく我々がつくる時、小学生を取り合いになることは避けたんです。また、中学生が少なくなったので、中学生から始めたという経緯はあります。

【横山】　大八木さん、確認なんですが、小学生のタグラグビーの全国大会の参加条件が学校単位であると？

【大八木】　学校長に申し込み書がいくんでしょうね。

【横山】　その理由がスクールは勝利至上主義になると？

【大八木】　そういうことを決めることが素敵じゃないでしょう。スクールで参加するのもありやし、そうしないと、学校長のラグビー嫌いの人はビリッと破って捨てる先生もいるかもしれない。好きやったら体育の先生集めてやろうやないか。その温度差がわかっとらへん。最初に考えを持ち寄った人らがね。

【横山】　学校単位でも勝利至上主義はありますよ。スクールに限らないんですね。勝利至上主義を是正するのであれば、スクールか、学校という二者択一の問題だけではないですよね。

【大八木】　全国大会をすることの矛盾は出てくるわけですよ。全国大会をすることがね、「学校単位でなくてもええんちゃうのん」というのを僕は言おうと思っているわけです。

【萩本】　１つはタグラグビーというのは、ラグビーの普及のためにラグビー協会が導入して、大八木が取り入れたのですが、それをやり始めて、学校体育に入れようと動いたんですよ、確か。ラグビーというものがつくと１つのものになってしまうので、楕円球を用いた競技で、今度文部科学省で入るはずなんです。

【横山】　種目として教科採用される？

【萩本】　ラグビーは別の種目で教科採用されるはずなんです。そういう側面があってラグビースクールが外れたんじゃないかと思いますけども。

【会場】　大八木さん、ぶっちゃけた話をしてもらってようわかりました、アマチャアの人と契約社員のことが。ラグビーがＪリーグやプロ野球に後塵を拝したのはプロがないからなんです。松平バレーボールが、ミュンヘンオリンピックで金メダルをもぎとった人が、「競技でプロがなければマイナーです。発展しません」と口を酸っぱくして言った通りになってきています。選手は可哀相ですね。国際的な流れもんになっているようです、フランスに行ったりして。これがプロ野球なら金屏風で18歳の時、阪神タイガース入りで１億円、5,000万円の契約金でわかりやすいですわね。金ばかりの契約金で、芸能人かぶれといわれる新庄が日本ハムを札幌で救っているじゃないですか、たった一人で。プロ野球が50億100億、震撼させるほど集めているんですよ。それをスター選手はあかん、平尾選手、大八木選手、松尾選手などスター選手がいた時、なぜプロ化しない。それだけの情熱がなかったのか。過去の反省ができないと将来はありませんよ。井の

中の蛙であったんです、各大学の監督も。そのためにワールドカップで箸にも棒にもかからない、あれだけ弱い、何回やってもAクラス、Bクラスと月とスッポンほど違いますわね、５か国で。オールブラックス、ワラビーズ、スプリングボックス、全然違います。というわけで、野球などのことをもっと勉強しておくという情熱を持って、皆に１億円の契約金を出させるように、思い切ってやっていただきたい。働きざかりの大八木さんと萩本監督、平尾氏でやらないとだめですよ。私は「そこまでわかりましたよ」ということを言いたいんですが、どうでしょう。

【横山】 答えるんですか？

【大八木】 その通りです。「御意」です。

【横山】「御意」でございます。

【会場】 商学部３回生です。萩本監督にお伺いします。去年、ワールドカップをテレビで見ていたらいい試合はするんですが、勝てそうで一勝もできない現状であると思います。2007年のワールドカップに向けて、どのようなチームをつくっていきたいと思っておられるのか、お聞きしたいと思います。

【萩本】 2007年まで監督をやるかどうか決まっていないんですけども。前回のワールドカップで全日本が果敢な、下に入るタックルをしたということで、あれだけの善戦で世界の評価も得ています。今年、私がなってまずやったのは、それを土台にしてさらに強固なディフェンス網と一人のプレーヤーが抜けた後、フォローすることが希薄になっていますので、昔はフォロー・パス・フォーの練習もやっていたんですが、今は外国のコーチ陣、システムが入ってきて分担がされている影響が強くて、一気にトライをとりにいくところが希薄なんです。この春やったのは、ディフェンスの強化です。11月から来年春にかけて、昨年度のワールドカップのベスト８の国と順次戦っていきます。その中で春やったことがどれだけ通用するか、ディフェンス力が昨年のワールドカップ以上のものになっているかを試していきたい。それで大敗すると前回の平尾監督のようにクビをきられるかもしれませんし、なんとかクビがつながってやっていくとしたら、日本が世界に戦っていくには小ささをメリットとしてやっていかないと。下に入るタックルなんです。カッコよくトライをとるなんてできないので、ディフェンス力を基盤として、スピードのある選手を集めて、平選手、仙波選手とか正面選手がいますが、彼らが2007年のワールドカップに入ってきてもらって、同志社の自由な発想のラグビーをスピード感を持ってやってもらう、そのように持って行きたいと思います。

【横山】 それではお一人１分間でまとめていただきまして、本日のシンポジウムを閉会したいと思います。川井先生から。

【川井】 この８月から９月にかけまして、横山先生と一緒にイギリスに調査研究に行きました。プロサッカー選手協会、日本のプロ野球選手会と同じような事務所に行きました。そこで感じたことですが、こっちの質問に対して的確にお答えになるし、どんな資料でも出してくる。スポーツに対する考え方、政策についても自信をもって答えていただいたという印象がありました。かたや日本の場合は、企業に調査に行ったり、学校に調査させてもらったりしますが、ICレコーダーを持っていき、「録音よろしいですか？」と言うと、必ず嫌な顔をされます。実務担当者が自分たちがやっていることが正しいのかどうかわからない状態で、グレーな状態で、自信がなく答えている。そういう意味では歯切れが悪い答えが多かったように思います。イギリスでは「もちろんいいですよ」、と。淡々と自信を持って話される。今まで日本の場合、国や企業や学校によってスポーツが与えられてきて、我々がそれについて正面から議論する場がなかったように思います。そういう意味では今、過渡期にあると思いますので、こういう機会を私は大切にしたいと思います。これから議論をどんどん前面に出して皆で考えて、胸を張って「日本はこういうスポーツ政策なんだ。京都はこういうスポーツ政策だ。同志社はこういうスポーツ政策だ」と言えるようになっていってほしいと思います。私もそれができるように研鑽を積んでいきたいと思います。ありがとうございました。

【大八木】 長時間ありがとうございました。よ

く考えてみると、日本のラグビーを動かしているのは同志社出身者、同志社出身者が幅をきかせているのではないかと、なんとなく感じることです。今回、来ていただいた方は我々のファンということで、承知しております。どうか一人ひとり、「ラグビーはええもんやで」ということを、ラグビーを知らない人たちに語りついでいただくことが、要望したいことです。最後にPRですが、マルチタレントのようなことをやっております。ちょこちょこテレビに出ておりまして、出ている時は見ていただきたいなということと、来年正月１月、４日と５日、NHKの時代劇スペシャルが前編後編であります。今回、大化の改新、渡辺篤郎さん、Ｖ６の岡田君、原田良雄さん、高島礼子さんと大八木淳之で、蘇我家の側近についていた人物らしいですが，ちょこちょこと出ていますので、どうか、どうか、見ていただいて、NHKのホームページに「何よりも大八木がよかった」と１行書き込んでいただくと、マシな朝ドラとか大河ドラマの口が来る。私が出ることによってラグビーの普及になるのとちゃうかなと思っております。今後ともよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

【萩本】　長時間どうもありがとうございました。テレビに出るよりも、母校のこういう場に出たことをうれしく思っています。競技力と普及と地域と結びつかないものだということですが、代表チームが強ければ一気にそういうことも進むのではないかと思いますので、今の立場であれば、ジャパンを強くして貢献すると同時に、もし要望があれば喜んで田辺の方に足を向けますので、また言ってください。ありがとうございました。

【真山】　今日のテーマは「地域貢献とスポーツ文化」だったんですね、忘れていましたけれども。スポーツ文化の話はあまり出なかったと思いますが、文化の側面で考えた時、地域のスポーツクラブとか、今、注目されていますし、関心が集まっていますが、クラブ文化が日本には必ずしも定着していないと思うんです。ヨーロッパの社会とは違うかと思います。スポーツに対する認識、考え方は日本には独特のものがあるかなと思います。そういうものを踏まえながら各競技団体、自治体、普及とか振興とかにかかわってくる人たちが、きちっと認識し、整理しておかないといけないのかなという気がします。スポーツにはある種の勢いも必要です。競技で勝利をおさめて、世界的に名前が有名になってというところが魅力であることも事実ですが、しっかりと普及させていこうと思うと、地味かもしれませんが、しっかりした分析をして、一歩一歩前進する戦略を立てないといけないのかなという気がいたしました。

【横山】　先生方、皆さん、長時間どうもありがとうございました。大八木さんにはラグビー普及とともにテレビだけではなく大学院の勉強も頑張っていただくことをお願いします。萩本さん、日本ラグビーの勝利を心より祈っております。どうも長時間ありがとうございました。これで閉会いたしたいと思います。